

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32608

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14267

研究課題名（和文）日本人米国留学生の知識外交への寄与 - 半世紀のライフヒストリー

研究課題名（英文）The Contribution of Japanese Study Abroad in the US to Knowledge Diplomacy: 50 Years of Lived Experiences

研究代表者

Asada Sarah (Asada, Sarah)

共立女子大学・国際学部・准教授

研究者番号：90806978

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：現在の国際社会では、多くの国家が協力しつつ競いあって知識基盤を拡大させており、「知識外交(knowledge diplomacy)」の重要性が増している。本研究は、日米の高等教育における国際化や留学が知識外交とどのように連関しているのかについて、定量的・定性的な実証的知見を提供するものである。ケーススタディでは、1963年から2013年までの50年間、米国の大学に留学した日本人の1年留学の長期的な成果に着目している。本研究成果は、留学先の国や世界とのつながりや意識が高まることで、知識外交における留学プログラムの役割を明確に示すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、グローバルな高等教育や留学が知識外交にどのように貢献するのかを明らかにするものである。研究結果は、海外留学が50年以上に渡り人々の生き方に影響を与え、日本とアメリカ、そしてより広い世界との間のさらなる知識やつながりをもたらすことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：As many nations cooperate and compete in a global knowledge-based society, knowledge diplomacy is becoming increasingly important. This research provides quantitative and qualitative empirical insights on how internationalization and study abroad in US-Japan higher education relates to knowledge diplomacy. The case study focuses on the long-term outcomes of Japanese one-year study abroad participants at US colleges over a 50-year timespan from 1963 to 2013. The findings demonstrate how study abroad experiences in the US continue to influence Japanese participants' academic, career, and personal trajectories over their lifetime. The cumulative findings illustrate the role of study abroad programs in knowledge diplomacy by creating connectivity with and awareness of the host country and wider world.

研究分野：高等教育学

キーワード：study abroad higher education outcomes knowledge diplomacy SDG 4.7 peacebuilding Japan United States

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

学部留学の経験は、グローバル化が進み、ますます相互依存する世界の一市民として、新たな機会や課題にうまく対処できる人材を育成することを意図して、潜在的な個人的成果に焦点が置かれることが多い。研究においては留学の短期的な影響に着目する傾向がある一方で、留学が個人に及ぼす長期的な影響への注目も高まってきており(例: IES 50周年記念卒業生調査、SAGE プロジェクト [米国]; グローバル人材 5000 プロジェクト [日本]; CHEERS プロジェクト、ソクラテス 2000 評価研究 [EU])。これらの調査研究が個人的成果についての全般的な理解を与えている。一年以内の留学経験が及ぼす長期的な影響について関心が高まりつつあるのは、グローバル化によって社会文化的な多様性を有するようになった世界において、必要とされる貴重なスキルを学生に提供するという、ソーシャルグッドとしての留学の可能性に端を発するものである (Yokota, 2016)。また、学ぶことによって理解し共に生きようというこの気運は、世界の教育を通して「平和と非暴力の文化、グローバル市民、および文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献について理解を促進すること」を目標に設定した SDG 4.7 にも反映されている。確かに、留学は知識を増やし、留学参加者と受入国、受入地域、そして世界とのつながりを深めることを可能にする (Asada, 2019)。さらに、留学経験は、学生の学術的、職業的、および個人的な成長に生涯にわたって影響を及ぼす (Akande & Slawson, 2000)。

Nye (2008) は、留学が外交上の将来のリーダーを生み出し、彼らに影響を与える可能性を指摘している。Metzgar (2016) は、留学は、人生の発達段階において、学生を受入国の文化、政治、および社会に触れさせ、「将来のための意欲的な通訳者と受信者の一群」を育成すると述べている (p. 266)。教育の個人的成果と外交に関する実証的研究は、たとえばフルブライトプログラム (Perna et al. 2015) のような国が後援する教育交流プログラムや、ジェットプログラム (Metzgar, 2017) などの国際交流プログラムに限定されている。Knight (2018) は「知識外交」という概念を提案し、国際的な高等教育の役割と、文化外交およびソフトパワーにおけるその伝統的な位置づけに紐づいた権力のダイナミクスに左右されることのない国際関係について、より良い理解を試みている。知識外交は、学術論文がまだ数少ない新たな重要分野である (Kitamura, 2015)。

この遡及的追跡研究は、1963年～2013年の間に米国の大学で1年間学んだ日本人留学生の個人的成果が、当人の知識の増強と日本と米国、そしてより広い世界とのつながりの強化にどのように貢献したかについて、人道主義的な見解をとるものである。1960年代以降、日米は留学に関して歴史的な相互関係を維持してきた。留学の目的地は多様化しているが、日本人留学生の最大の目的地は依然として米国のままであり、2004年には5,428人だったが、2018年には19,891人と3倍に増えている (JASSO, 2004, 2020)。次世代の日米リーダーを育成するという留学の潜在力は、2011年の東日本大震災直後からの日米教育協力の拡大の中核を成している。実際、将来のリーダーと二国間の架け橋を生み出すという留学の役割は、外交と国際関係においてたびたび言及されている (Cull, 2019)。

2. 研究の目的

現在の国際社会では、多くの国家が協力しつつ競いあって知識基盤を拡大させ「知識外交 (knowledge diplomacy)」の重要性が増している。本研究は、日米において高等教育の国際化・

留学が知識外交に対してどのような影響を及ぼしているのか、定質的及び定量的に研究し実証的に明らかにすることを目的とした。研究方法としては、1963年から2013年までの50年間を対象に、日本から米国への1年間のリベラルアーツ留学経験者に対して、オンライン定量アンケート調査と定性的なオンラインアンケート調査を軸にした遡及的追跡研究を実施した。その上で1年間の米国留学が及ぼす影響について下記3点からの分析を行った。(1) 経験者の学問的成長・職業的成長・個人的成長に対してどのようなインパクトを与えたのか。(2) そのインパクトは、留学先の国との関係にとどまるものなのか、またはより広い国際性を獲得したものであるのか。(3) 今後、「知識外交」を推進する上でいかなる制度整備が必要となるのか。これらの点について明らかにするのが本研究の目的であった。本研究を通じて、1年間の留学経験が、個人の人生に具体的にもたらす長期的影響、また、留学先の国や世界との相互の知識外交における影響について具体的かつ実証的に究明し、これからの社会に必要とされる高等教育の国際化・留学の意義について新たな見通しを示すことを目指した。

3. 研究の方法

Japan Study は、1960年代以来、日米を結びつけている最初の教育交流プログラムの一つとして歴史的な重要性を有するため、本調査の事例研究に選ばれた。Japan Study は、米国のアールカレッジにある本部と早稲田大学内のアールカレッジ職員が駐在する支部により運営されているコンソーシアムプログラムである。Japan Study は、米国のリベラルアーツカレッジ26校と日本の早稲田大学とをつないでいる。早稲田大学は、学生を選抜して当プログラムに推薦する。当プログラムは、アールカレッジと早稲田大学のJapan Study オフィスが完全に管理している。Japan Study のディレクターが当研究を承認している。Japan Study スタッフによると、1963年から2013まで早稲田大学からアメリカへの留学修了生は約750人です。学生は通常、8月から9月の間に受入カレッジに到着し、翌年5月～6月の終了まで、米国で1年間勉強することになる。この1年間のプログラムデザインにより、出発前および現場でのオリエンテーション、現場でのサポート、受入国の人々との生活の準備、教科・非教科活動を通じたキャンパスへの積極的な関与など(Nagayama & Asada, 2014)、公式・非公式レベルでの学術的・社会的統合が可能になる(Severiens & Schmidt, 2009)。

二つのフェーズから成る遡及的追跡研究は、説明的戦略による順次混合法研究デザインに基づいている。フェーズ1のオンライン定量アンケート調査とフェーズ2のフォローアップ定性的なオンラインアンケート調査を軸にした追跡調査を実施した。以下が、本研究のリサーチクエストである。

- (1) 経験者の学問的成長・職業的成長・個人的成長に対してどのようなインパクトを与えたのか。
- (2) そのインパクトは、留学先の国との関係にとどまるものなのか、またはより広い国際性を獲得したものであるのか。
- (3) 今後、「知識外交」を推進する上でいかなる制度整備が必要となるのか。

4. 研究成果

本研究は、半世紀にわたる日本人の米国留学について、歴史的かつ斬新な理解を提供するものである。第一に、この50年間にわたる遡及的追跡研究は、単一のプログラムの長期的な影響に焦点を当てている。したがって、すべての利害関係者にとっての投資収益の評価が可能となり(Sutton & Rubin, 2010)、社会・文化・経済・政治において影響を及ぼす歴史的指標につい

て詳述することができた。第二に、外交的な視点から留学が及ぼす国境を越えた影響を理解する重要性が増している (Asada, 2020)。特に、一つの留学プログラムを使用し、個人的な影響を二国間で、また国際的に観察することにより、一つの留学プログラムを知識外交の一形態として体系的に検証するための経験的証拠が得られる。第三に、本研究は、日米間のアカデミックなモビリティの双方向の流れについて歴史的理解を提供する。本研究は、50 年間における米国人の日本への留学経験の影響に関する筆者の先行研究 (Asada, 2019, 2020) と、日米の教員のモビリティによる影響に関する筆者の研究と併せて、50 年間にわたる二国間の学生と教員の双方向の流れによる影響についての歴史的・経験的基礎を提供した。外交的な視点は、日米のつながりがどのように育まれているかを示すことになる。第四に、日米には教育交流に関して特別な歴史的關係がある。歴史的に、日本人の留学先として米国は 1 位の座にある。ユネスコのデータは学位を求める日本人留学生が減少していることを示唆しているが、JASSO の統計はより多くの日本人が大学の非学位プログラムで米国に留学していることを示唆している。

本研究の理論的枠組みにおいては、留学が学生のその後の人生にどのように影響するかについて、人道主義的に理解する立場をとっている。本枠組みは、留学プログラムを高等教育による知識外交 (Asada, 2019, 2020; Edwards & Kitamura, 2019; Knight, 2018) への貢献の一環として理解するために、transformative learning (変形学習) (Mezirow, 2012) と conscientization (意識化) (Freire, 1970) の 2 つの教育理論から導き出されたものである。変形学習と意識化は、教育の人道主義的性質、学習者が生活する現実的な状況、および教育が学生と社会に貢献できるようにするための純粋な人的交流の必要性に焦点を当てている。これにより本研究は、知識外交という概念において、学生がグローバル社会の複雑さを理解し、それに対応できるようにするために、留学プログラムが留学生をどのように育成するかを明らかにすることを可能にする。知識外交において、留学プログラムは、世界についての知識だけでなく、世界のための知識も生み出す源である。留学生はその後の人生においてその知識を共有・活用し、国や地域間の公式・非公式の関係を構築して管理し、それに従事する (Asada, 2020)。つまり、本研究は、この枠組みにおいて、留学後の学術的、職業的、および個人的な経験全般を通して、受入国、受入地域、そしてより広い世界に関する留学参加者の知識とそれらとのつながりを追跡し、留学プログラムの可能性とそれが知識外交に供する国際経験について調査するものである。

本調査結果は、留学の概念を発展させること、またより広い世界についての理解およびつながりを促進するという留学の役割を発展させることに貢献した。本研究のアプローチは、留学プログラムがその後の学術的・職業的・個人的な経験を通じて元留学生の個人的な成長にどのように貢献するか、そして、これらの個人的な発展が知識外交を通じてグローバルに共通するソーシャルグッドにどのように貢献しうるかについての枠組みを構築することを可能にした。

文献リスト

- Akande, Y., and C. Slawson. (2000). "A Case Study of 50 Years of Study Abroad Alumni." *International Educator* 9(3): 12–16.
- Asada, S. (2019). Study abroad and knowledge diplomacy: increasing awareness and connectivity to the host country, host region, and world. *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, 1-16.
- Asada, S. (2020). *50 Years of US Study Abroad Students: Japan as the Gateway to Asia and Beyond*. Routledge.

- Braun, V., V. Clarke, E. Boulton, L. Davey, & C. McEvoy. (2020). The online survey as a qualitative research tool. *Journal of Social Research Methodology*, Advanced Online Publication.
- Cull, N. J. (2019). *Public diplomacy: Foundations for global engagement in the digital age*. John Wiley & Sons.
- Edwards, S., & Kitamura, Y. (2019). Knowledge Diplomacy and Worldview Diversity Education: Applications for an Internationalized Higher Education Sector. In *Contesting Globalization and Internationalization of Higher Education* (pp. 143-161). Palgrave Macmillan, Cham.
- Freire, P. (1970). *Pedagogy of the oppressed* (M. Bergman Ramos, Trans.). New York : Herder and Herder.
- JASSO. (2004). *International students in Japan 2014*. Retrieved from http://www.jasso.go.jp/en/about/statistics/intl_student/data2004.html
- JASSO. (2020). *International Students in Japan 2018*. Retrieved from http://www.jasso.go.jp/en/about/statistics/intl_student/data2018.html.
- Kitamura, Y. (2015). "International Competition and Cooperation in Higher Education in East Asia: Some Reflection Based on the Concept of 'Knowledge Diplomacy.'" *Center for Excellence in School Education, Graduate School of Education, University of Tokyo, Research Bulletin* 1 25–53.
- Knight, J. (2018). *Knowledge Diplomacy: A Bridge Linking International Higher Education and Research with International Relations*. Discussion Paper for the British Council. Accessed 08 October 2018. <https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/kno.pdf>
- Metzgar, E. (2016). Institutions of higher education as public diplomacy Tools: China-based university programs for the 21st Century. *Journal of Studies in International Education*. 20(3), 223-241.
- Metzgar, E. T. (2017). The Japan Exchange and Teaching (JET) Program: 30 years of public diplomacy in practice. In *International Education Exchanges and Intercultural Understanding* (pp. 113-130). Palgrave Macmillan, Cham.
- Mezirow, J. (2012). Learning to think like an adult: Core concepts of transformative learning theory. *Handbook of transformative learning: Theory, research, and practice*, 73-96.
- Nagayama, N. & S. Asada. (2014). *Japan Study and Waseda University: 50 Years of International Exchange*. Tokyo, Japan: Japan Study Program.
- Nye, J. S. (2008). Public diplomacy and soft power. *The ANNALS of the American Academy of Political and Social Science*, 616(1), 94–109.
- Perna, L. W., Orosz, K., & Jumakulov, Z. (2015). Understanding the human capital benefits of a government- funded international scholarship program: An exploration of Kazakhstan's Bolashak program. *International Journal of Educational Development*, 40, 85–97.
- Severiens, S. E., & Schmidt, H. G. (2009). "Academic and Social Integration and Study Progress in Problem Based Learning." *Higher Education*, 58 (1): 59-69.
- Sutton, R. & Rubin, D. (2010). Documenting the academic impact of study abroad: Final report of the GLOSSARI Project.
- Yokota, M. 2016. "Survey of Global Personal Development and Long-term Impact of Study Abroad." Meiji University.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Sarah Asada	4. 巻 29
2. 論文標題 Higher education and the SDGs	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Bulletin of Center for Interdisciplinary Studies of Science and Culture, Kyoritsu Women's University & Kyoritsu Women's Junior Colleg	6. 最初と最後の頁 53-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 4件／うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Sarah Asada
2. 発表標題 Exploring the lifelong influences of Japanese one-year study abroad in the US over 50 years: An humanist approach
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (CIES) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sarah R. Asada
2. 発表標題 The Personal and Social Impacts of Study Abroad
3. 学会等名 World Education Research Association (WERA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sarah R. Asada
2. 発表標題 Japanese one-year study abroad in the US: A historical perspective from the 1960s to 2010s
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (CIES) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sarah Asada
2. 発表標題 Higher education, internationalization, and SDG 4.7
3. 学会等名 Waseda International Workshop on Higher Education and SDGs (Global Governance) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Sarah Asada
2. 発表標題 日米高等教育における国際化: 個人と社会のつながりに着目して
3. 学会等名 Wednesday Colloquium, Kyoritsu Women's University (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sarah Asada
2. 発表標題 グローバルをめざせ! ~海外留学で個人と社会を変革する~
3. 学会等名 Kyoritsu Academy (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sarah Asada
2. 発表標題 International research projects and positionality
3. 学会等名 Contemporary Issues of Southeast Asia Seminar, University of Tokyo (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sarah Asada, Diana Kartika, and Rita Nazeer-Ikeda
2. 発表標題 Providing equitable and quality education: Including students with disabilities in EMI university programmes in Japan
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (CIES) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 JungHyun Ryu and Sarah Asada
2. 発表標題 Promoting SDGs through the new model university: Binational universities in Vietnam
3. 学会等名 International Conference on Innovation in Higher Education (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sarah Asada, Rita Nazeer-Ikeda, and Diana Kartika
2. 発表標題 Higher Education, internationalisation, and SDG 4.7: Current realities and future possibilities
3. 学会等名 British Association for International and Comparative Education (BAICE) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Rita Nazeer-Ikeda, Diana Kartika, and Sarah Asada
2. 発表標題 Enduring or resisting the developmental state: A comparative analysis of evolving political influence on education in Singapore and Japan
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (CIES) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Sarah Asada (Edited by S. Ashizawa and D Neubauer)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 254
3. 書名 "Changing dynamics occurring in Asia Pacific student mobility" in Student and skilled labour mobility in the Asia Pacific region: Reflecting the emerging Fourth Industrial Revolution (pp. 129-146)	

1. 著者名 Sarah Asada and JungHyun Ryu (Edited by X. Zhao, M. Kung, K. Bista and Y. Ma)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 STAR Scholar Books	5. 総ページ数 175
3. 書名 "From international students to global human resources: Can policies be the matchmaker for Japan's future?" in Home and abroad: International student experiences and graduate employability. (pp. 31-46)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Japan Study			
ベトナム	Vietnam National University	Vietnam Japan University		